宝石のタイムカプセル

蒼羽　レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宝石のタイムカプセル

【Ｎコード】
Ｎ６９８１Ｍ

【作者名】
蒼羽　レイ

【あらすじ】
間宮オーナーの娘、間宮愛はジュエリーブランド立ち上げることになり、そのセレモニーを翌日に控えていた。しかしその前日に、怪盗キッドからの予告状が届く。本当はセレモニーに出たくないと思っている彼女…。そんな彼女の元に、今宵の獲物を盗むため、月下の奇術師が舞い降りる！

思惑

美の象徴。宝石は数々の歴史や伝説を残し、その屈折から生み出される輝きで様々な人を虜にしてきた。身につける人間に対して、その人間の普段の魅力より、何倍もの魅力を引きだす装飾品。
そんな宝石に魅了された人間のひとりがここにもいる。宝石のデザインを手がけることを夢見るひとりの娘。彼女の名前は、間宮愛。
彼女は先日ジュエリーブランドを立ち上げ、翌日にはセレモニーの主役という大役を担っている。セレモニーはジュエリーブランドの発表会だ。年を若くして立ち上げることとなる。数々の著名人やテレビ取材がくるだろう。
「出たくない」
しかし、愛はその主役にも関わらず、未だ決意ができないでいた。中心人物として自分が愛想よく笑顔で立っている姿なんて想像できない。
おまけに今回、さらに注目を浴びる出来事が起きてしまったのだ。ベッドでうつ伏せのまま、彼女は1枚のカードを眺めては、ため息をつくことを繰り返していた。体を起こし、ベランダにむかうと手すりに手をおいた。見上げれば、ほぼ満月のような月明かりが彼女を照らす。この暗闇が永遠に続けばいいのに。外が明るくなってほしくない。今は眩しく見えるほどの月を、彼女は見上げながらつぶやいた。
「キッドがめちゃくちゃにしてくれたら、この話はなしになるかな」

☆★☆★

「中森警部、娘はこのダイヤを身につけて、明日のセレモニーは出席しなくてはならんのです。守ってくださいよ、この先代から受け継がれたブルードリームを」

間宮家の大広間の一角。透明なガラスケースの中で、厳重にダイヤは守られていた。
「ええ、わかってますよ」
中森警部は鋭い目つきでうなづいた。キッドが獲物を狙ったとき、その獲物の持ち主に必ず言われてきている言葉だ。警部も宝石の狙われた人間の胸中を察して、そのことは肝に銘じている。
ジュエリーショップのオーナーである間宮進は、スッと懐から1枚のカードを出した。
「いいですか中森警部、あのガラスケースはこのカードがないと開かないようになっています。さらにこのガラスケースの周りには、縦横無尽にセンサーが張り巡らされており、ダイヤを持ちあげれば警報がなって特殊合金の檻がお目見えする。中森警部の手腕もあって、警備態勢も万全です。盗まれようがないと思いませんか？むしろこの厳重に守られている部屋のなかで、彼がどうやってダイヤを盗みだすのか、大変見物な捕り物劇になりそうです」
「いや、油断してはいけません！キッドは月下の奇術師と異名をとる大泥棒、こうした厳重なセキュリティを張ったにも関わらず、ワシは何度も煮え湯を飲まされている。油断しているとこれぐらいのセキュリティなんて、あっという間に解かれてしまうのが関の山…」
だが今度こそと思っている中森警部は、異変を逃すまいと辺りをきょろきょろと見まわした。
「なるほどそうですか…。ではこの際、このカードは私が持つより中森警部にお渡ししておいたほうがよいのかもしれませんね。キッドに関しては私よりも経験も知識も豊富のようだ。中森警部に預けておいたほうが安心でしょう。我々のダイヤを守ってくれると期待しておりますよ」
期待を込めて中森警部の肩に手を置くと、カードを手渡した。
目線の先の窓から視界に入った月が見え、その月を間近でみるため窓の近くに歩み寄った。
「まぁそれに守ってくれと言いながら、キッドに宝石を狙われると

いうのは悪いことばかりではないと思っているのも半分本音なのですよ。キッドが狙った宝石、これは莫大な広告宣伝費を払うより価値がある。これで世間からの注目も浴びることができますからね」
中森警部は眉をひそめ、月を見上げる間宮オーナーの背中に言葉を投げかけた。
「キッドは泥棒、犯罪者ですぞ！そういった発言は慎んでいただきたいものですなァ」
振り返って中森警部の顔をみると、笑みを浮かべた。
「まぁまぁ警部さん。怒らんでくださいよ。私は経営者、この状況をいかに最善の方向へと導きだすかを常に考えてしまう。キッドがどんな状況でも大胆華麗を美徳としているならば、私と方向性は違えどその信念はわかりあえるかもしれませんねぇ。怪盗が最高のパフォーマンスを求めるとしたら、私は最善のパフォーマンスを求めるという点ではね」
「ふん」
ったく食えねぇオッサンだなという言葉を飲み込み、代わりに鼻を鳴らすだけにした。
「私は娘の様子を見てきますので、中森警部あとはよろしくお願いします」
ガラスケースのダイヤに一瞥し、口元の片端をつりあげながら部屋を出るためにドアへと向かう。機動隊員のひとりが気を利かせてドアを開けると、間宮オーナーは手を軽くあげて礼をしめし部屋を出ていった。

間宮オーナーが部屋を出て行ったあと、その機動隊員はパタンッとゆっくりとドアを閉める。そして時間差で間宮オーナーの後をゆっくり歩いて行った。
間宮オーナーに軽く頭を下げてドアを開けているとき、彼の不敵な

微笑みに気づいた者は誰もいなかった。

思惑（後書き）

こんにちは。蒼羽レイです。長い年月を経て大分、おまたせしました。ごめんなさい。きっともう私のこと知っている人はいませんね。はじめてのかたははじめまして。昔、よく書いていました。

続きで放置しちゃって…。昔の続きを書く前に私まだコナンの小説書けるかなー？小説あれ以来書いてないもんなぁって、不安だったので、連載ですが短いお話をひとつ書いたので、お届けしまーす。昔の感想もゆっくりペースですが、ちゃんと全部返していきます。全部読みました。ありがとうございます。

てゆか、きっかけがたまたま覗いたら、こんなにも感想がきているとは思わず…それに胸をうたれました。感想の力ってすごいですね！中途半端なことして申し訳ないのと嬉しいのとで続きを書こうと思ったんです。

このお話は最終話までもう書いてあるので、更新は早いです。安心してご覧になってください笑”ではではｘｘｘ

前景

「いいかァ！キッドは今夜１９時きっかりにこのフロアーを訪れ、ブルードリームを盗みに来る！各ブロックを警戒中の各員は、気を引き締めろ！やつはあと５分でこの家にくるんだからなァ！」
無線で、各員の気を引き締めようと声を張り上げる。しかしふと思いなおし、隣にいた機動隊員の顔をつねりだした。
「い、いひゃいです！中森警部！手を手を！！」
それ以上つねらないでくれといわんばかりに、涙目で中森警部に訴えた。
「いや…この家にくるどころか」
ズラリと機動隊員が並んでいる顔をひとりひとりうかがう。
「やつは、このフロアーのどこかに、すでに紛れこみ様子をうかがっているかもしれん！不審人物を見つけ次第、ただちにワシに報告するんだァ！」
叫んでいると、横から機動隊員に声をかけられた。
「中森警部！」
「あん？」
「オーナーから言伝を預かっております。犯行時刻の間、娘のところにいるので代わりに宝石を守ってくれと…」
「なんでオーナーは娘のところなんかに」
「はぁ、なんでも娘さんが大変緊張していらっしゃるようでして。明日のセレモニーでただでさえ緊張しているうえ、その前日にこのようなことがおき、気が動転しているだろうからついていてあげたいそうですよ」
「まぁ、無理もないか。宝石がなければ、セレモニーは台無し…延期せざるを得ないだろうからな」
こちらとしても、オーナーがいないほうが指揮をとりやすい。
「よしわかった。お前はあと何人かの機動隊員を連れて娘の部屋の

前の警備につけ！このカードの他にオーナー自身も予備のカードを所持している可能性は十分にある。犯行前にキッドに眠らされて変装されるのを防ぐんだ。いいか？なにか異変に気づいたらすぐにワシに知らせろ！少しの異変も見逃すんじゃないぞ」
ハッと機動隊員が走り去るとき、中森警部と肩がぶつかった。少しよろけたが、機動隊員が走り去るのを見送り、腕時計を見る。
あと5分…。確認すると心臓の鼓動が速くなった。

その走り去った機動隊員がぶつかった拍子に、カードを抜きとったとも知らずに…。

☆★☆★

そのとき愛は自室にいた。ピンクの花柄のルームウェアを着て、首からはネックレスを下げている。鎖で繋がれた先端にはきらきらと輝くダイヤがついていた。クローゼットのほうへ顔を向ければ、ハンガーにかけられた1着のドレスが目に入った。白いレースがふんだんにあしらわれたドレス。誰もがため息をつき、女性なら1度はきてみたいと憧れるドレスである。しかし今の彼女にとってそのドレスの存在は、まるで何トンもの鉄を背負うような重みを感じた。
そのドレスを目の前にしながら、1枚の紙を開く。
「いつから夢を追いかけることがつらくなったんだろ」
紙に描かれているもの、それは愛が小さい頃に書いたデザインだった。クレヨンで書かれていたせいか、線はくねくねと曲がり、色はあちこちにじみ、こすれている。それでも、この絵には迷いのない力強さが伝わった。そして一緒に挟まっている中学生の頃の作文を見返す。その作文にはジュエリーデザイナーになるという溢れんばかりの希望がつまっていた。しかし今はもう20歳になった自分である。現実はもっと厳しく理想とは違う。競争だって激しいものだとわかってきた。だから道の険しすぎる場所を歩んで、自分が成功

する自信がないのだ。愛はくしゃくしゃになるぐらい力強くその紙を強く握る。
「夢なんて追い求めていたら、だめよ」
彼女はふと、部屋の時計を見た。
「キッドがくる時間だ…」
彼女がつぶやいたとき、時計の針は１９時ちょうどを示していた。

前景（後書き）

こんにちは、蒼羽レイです。
さて自分の中での伏線編も終わりました。次回から話がピークになります。最近暑いですねー。私は焼けたくはないんだけど、朝早起きしてお散歩してます。まだそこまで日差しも強くなくてひと通りも少なくて超気持ちいいよん。

昨日は誰も読んでないかもって思いましたが７４人の方が読んでくれていました。ありがとう。やっぱり嬉しいものですね。えへへ。ひとりでも楽しみにしてくれている人がいるなら、続き書けます。感想など「読んだぜ、いえい」「普段なにしてるの？」「どんな風にキャラ動かしてる？」みたいな、まぁなんでもいいです。お時間あったらぜひぜひ一言くださると、交流できて嬉しいでーす。時間がなかったら放置でいいですよ～☆

ではｘｘｘ

偽装

（さァキッド、どこから来る！？）
カードは自分が持っている。このカードがない限り、あのガラスケースは開かない。予備を所持しているかもしれないオーナーには機動隊員をつけている。

ガラスケースに視線を送り、手さぐりで懐のカードを探って確かめようとしたその瞬間…
フッ――
ブレーカーの音が落ちるような音とともに一気に照明が落ちた。辺りが真っ暗な闇に包まれる。

「警部！明かりが！！」

突然の出来事に機動隊員たちは動揺し、ざわざわと衣ずれとともに人が動く気配を感じた。持ち場を離れダイヤのもとへ行くべきか判断に迷っているのだろう。中森警部は声を張り上げた。

「全員持ち場を離れるなよ！暗闇に紛れるのは、キッドの常套手段だ！！予備の電源に切り替えろ！」
「ハッ！」
ガシャンッという音とともに、フロアー内の照明が一気につく。

中森警部は真っ先にガラスケースを見た。
「バカな！？ダイヤが盗まれてる！？」
そんなはずはないと懐にあるカードを手で探る。カードのふちと思われる部分に指が触れる。
（ほーら、ちゃんとワシのここに…）

しかしそのカードを取り出して、中森警部は目を丸くした。
「って、カードがすりかわってるぅぅぅ！」
中森警部が懐から取り出したカードは「残念でした」という文字に舌をだしたイラストが描かれたものにすり替わっていた。
「い、いつのまにカードを！！」
そのとき、バンっとドアを勢いよく開き、間宮オーナーがうろたえた表情でフロアーへと入ってきた。
「私の宝石は無事ですか」
ガラスケースに目を向けるとダイヤがなくなっていることに気づき、間宮オーナーは目を見開いた。
「ダ、ダイヤが盗まれてる…」
「ええ残念ながら、盗んでいったようですな」
「なんてことだ…」
「ワシのカードがいつのまにか、キッドにすり替えられていたんですよ」
床に投げ捨てられたカードを拾い上げ、間宮オーナーに渡す。
間宮オーナーはそのカードをまじまじと見た。
「じゃあ…さっき私が見た機動隊員の方は、キッドだったということですか」
「なにィ！！！？」
「ダイヤを手に持っておりましたから。私はてっきり彼が守っているものだと思っていたんですが…」
中森警部はその瞬間、さっきぶつかってきた機動隊員を思い浮かべた。思い当たるのは、あいつだ。
「そうか！あのときだなァ！？キッドがワシのカードとすり替えた

のは！！お、おのれぇぇ…」
拳をふるわせて、中森警部は無線のスイッチを入れる。
「全員、聞こえるかァ！キッドが機動隊員の姿で逃走中！周囲に怪しい奴がいないか確認しろ！それから、各ブロックを警戒中の者は全員外の周辺を探索だ。まだ奴は近くにいるかもしれん！！全員横にいるやつの顔をつねりだせぇぇ！」
中森警部は、間宮オーナーを置いて急いで部屋を後にした。

☆★☆★

コンコン――
ダイヤを握りしめて愛がベッドに座っているとき、部屋をノックする音が聞こえた。
「はい」
カチャッとドアが開かれる。ゆっくりと歩を進めて入ると、ドアに鍵をかけた。
「終わったよ」
部屋に入ってきたのは間宮オーナーだった。

「じゃあ、キッドは！？」
「ああ、盗んでいったよ」
間宮オーナーは、ふふっとおかしそうに笑う。
「偽物をね」

「ふーん…」
本当の宝石は愛が首から下げているダイヤだ。盗まれなくて喜ばしいことだというのに、愛は険しい表情をしている。
「どうしたんだ？そんな顔をして。明日のセレモニーは無事開催できるというのに」
「パパ、盗んでほしかったなんて言ったら…怒る？」
うつむいて思わず口から出てしまった言葉で意を決したのか、顔をあげて自分の父親の目をみる。
「私、自信ないの。ジュエリーデザイナーとして、この若さでブランドを立ち上げて成功する自信が…！」

このブランドの立ち上げはそもそも父親が提案したものだ。母親がモデルをやっておりその遺伝子を引き継いだためか、容姿に恵まれ今では雑誌の読者モデルとしても愛は有名である。父親はその人目を引きつける容姿とデザイナーの能力に目をつけ、ブランドを立ち上げる準備を勝手にすすめていたのだ。
愛には専属モデルや芸能界の話もきたが、断固拒否してきた。読者モデルなら、趣味の範囲でできるが、専属や芸能界はプロの世界だ。その世界に入ったらもう引き返せないことがわかっている。普通に就職活動をしていれば、普通に結婚できる、何も自ら苦労することはないと考えていた。

オーナーはしばらく沈黙し愛の表情をうかがいながら、慎重に言葉を選んだ。
「その若さでブランドを立ち上げるなんて誰にもできることじゃな

いんだぞ」
「世間からみたらそれは華やかに見えるわよね。でも、ブランドを立ち上げたらもう学生として友達と遊ぶことも難しい、企業に就職することも諦めなくちゃ。そこまでやって失敗したらどうするの？私はもう２０歳よ！将来にわたって好きなことをやり続けることが、どれだけ難しいことかわかる」
失敗が怖い。覚悟もできない。こんな状態では無理だ。
愛はぎゅっと目をつむり、父親に訴えた。
「だから…まだ早いし、無理だと思うの！！」
愛が発した言葉の余韻が静寂を巻き込み、なんとも気まずい空気を漂わせていた。

間宮オーナーはふぅと息をつく。そして窓際に立つと、カーテンを少し開け窓の外を眺めた。赤いサイレンが目がちかちかするほど、この家を取り囲んでいる。
沈黙を破ったのは間宮オーナーからだった。
「なるほど。だから、盗んでほしいだなんて…」
窓に寄りかかりながら、彼女を見つめる。彼女というと目を合わせようとしない。
ちらりと横目で見れば、綺麗なドレスが目に入った。明日の華やかな舞台にふさわしい質である。
しかし着飾るために用意された衣装は、今出番を失おうとしていた。

彼は腕組みをしながら、下を向いてふっと笑む。
「なら…あなたの望みを叶えて差し上げましょうか？」
「え…？」
急に変わった態度と声色。目と目が合ったとき、彼の双眸が力強く輝きが増したように見えた。

彼女は目を見開いた。

まさか――！

「あ、あなた…」

（そんな…うそでしょ）

彼女は首をふりながらつぶやいた。

「私の父親じゃない…？」

「ええ…月下の淡い月明かりの下で、あなたの宝石を盗み出そうとしている…」

バサッと彼が自分の衣服をはぎ取れば、その衣服は彼女の視界を覆う。衣服に気をとられた一瞬の間に脱ぎ捨てて現れたのは、真っ白な衣装を身にまとう彼の本来の姿だった。

「ただの泥棒ですよ」

☆★☆★

その頃、中森警部はキッドを探していた。

「くそっ！キッドのやつ、どこへ行ったんだァ！？」

この家の周辺は街灯が少ないため、ライトをつけていても暗闇で先がよく見えない。もうずいぶんと時間もたつが、周辺を散策してもキッドの姿は見つけられなかった。

「もうこの時間だしな。キッドのやつも、もう完全に逃げちまっただろうし…」

そろそろ撤収の命令を下す頃合かと思っていた瞬間…

「いや…諦めるのはまだ早いですよ、警部さん」

横の路地から足音が近づいてくる。

「誰だ！？」

中森警部は足音のする方向へ懐中電灯の光をむけた。

しかし、懐中電灯の先に人影はとらえることはできない。

「彼は恐らくまだ家の中…」

そのとき懐中電灯の光に人影がうつった。

「鷹のように鋭利な爪を突き刺して、さも獲物をとったかのように見せかけて真実を隠している…そして今頃はその狡猾さで本当の獲物を爪にかけている最中だ…。大丈夫、今から行けば確保にはまだ間に合いますよ」

（ん？待てよ…この言い回しこの声、どっかで聞き覚えが…）

中森警部は手をあごにあて、首をかしげる。記憶の糸をさぐろうとし辿りつきかけた瞬間、彼が不敵な笑みを浮かべながら姿を現した。

「お久しぶりです、警部さん。探偵の工藤新一です」

獲物

（うそ…）
動揺を隠しきれない彼女は1歩2歩と後ずさりをする。
「私がダイヤを盗めば、明日のセレモニーでそのダイヤは付けられない。それを口実に、やめることができますよ」

そう言いながら、彼も1歩2歩と彼女に歩み寄った。
「きゃっ」
彼女は後ずさりしているうちに、床の上に出しっぱなしだった作文や絵の入った箱につまずき、そのままバランスを崩し後ろに倒れそうになった。
「おっと」
彼女が床の上で頭を強打しそうになるのを、キッドはとっさ彼女の頭に左手をまわして頭を守ろうとする。

（危ねぇ、怪我させるとこだったぜ…）
ふぅとキッドがひと息つく。
危うく頭を打つところだった彼女は、抱きかかえられながら目をぎゅっとかたくつむっていた。怖かったのだろう、キッドの装束を左手で握りしめていた。しかし、もう一方の手は…。
彼はそれを見てフッと微笑み、彼女の右手に視線を移しながら言う。
「盗んでほしかったなんて言いながら、どうやら明日（あす）の行方を握るこのダイヤを私から守りたいのが本音のようで…」
愛は、無意識のうちに自分の首に下がっているダイヤを強く握りしめていた。
「そ、そんな…こと」

言葉がつかえる。ないって果たしていえるのだろうか。このダイヤを狙っているキッドが至近距離にいる。渡してしまえばいいのにと頭のなかから声がするが、心のどこかでは盗まれたくないと思っていた。

ふとキッドは箱から散らばった紙と絵が目にとまり、それを空いている右手で拾い上げた。
数十秒ほどで目を通すと、愛の方へ視線を向け、笑みを浮かべる。
「気持ちの甘えから逃げてはいけませんよ、お嬢さん。ジュエリーデザイナーになりたいという夢があるならね」
「あっ！それは…」
いつのまに読まれていたのか、キッドの手には愛の絵と作文が握られていた。見られたくないものを見られて、顔を真っ赤にした彼女は取り返そうと手を伸ばす。
「ちょっと！返してよ」
しかしキッドは抵抗もせず、キッドはすんなりと絵と作文を愛に返した。

「ほんのひととき」
「え？」
彼は彼女の頭を支えていた手を今度は体に回して、もう一方の手で彼女の手をとると、助け起こしてベッドへ座らせた。そうして自分も隣に座る。
「華やかな舞台に立ち、自分が主役になるときですよ。それ以外はほとんど地道に努力をする日が続く…もっと自分を磨いて理想に近づくためにね。ダイヤモンドもダイヤモンドでしか磨けないように、自分を磨けるのは自分だけです」
「でも…つらいじゃない。努力して結果がでるとも限らないのに。

あなたはつらくないの？」
「その華やかな舞台に立ったものだけが感じることのできる感覚がいつしか癖になり、もう1度その舞台に立ちたくなるんですよ。地味でつらいことをすることも厭(いと)わなくなるほどにね…」
犯罪者なのに世間では人気者であり憧れる人間も少なくない。でも憧れだけではなれないから、怪盗になる人間はめったにいないのだ。本当のプロとは全てを受け入れて楽しんでいる人間なのかもしれないと愛は感じた。
「ねぇ、あなたは怖くないの？一歩間違えれば…自分に能力がなければ、警察に捕まっちゃうかもしれないのよ？そしたら将来がめちゃくちゃになってしまうかもしれないのに」

彼はベッドから立ち上がると窓の方へと歩いて、カーテンを除く。
「…それはそのリスクを覚悟しても、怪盗を続けたい理由が私にはあるから…かな？」
振り向くと、さっき助けおこしたときに盗ったダイヤを自分の掌に乗せて彼女に見せた。
「あ…！」
いつのまに。盗られた瞬間を愛は気づかなかった。
「さて、おしゃべりはここまで。間宮オーナーに変装していたことが、どうやら中森警部にもバレたようですし」
窓の下を見れば、中森警部が乱暴にパトカーのドアを閉めて、こちらへ走ってむかってくるところだった。足音がだんだん大きくなっていく。ドンドンっと何回か音がしたあと、鍵が強引に外れバンっと勢いよくドアが開いた。

「見つけたぞ、キッドォォォ！！」
「これはこれは…中森警部、長時間の捜索ご苦労さまです。今日は

もう夜も更けておりますし、家に帰ってゆっくりお風呂にでもつかったほうがよろしいんじゃないですか？あんまり遅くなると娘さんが心配なさいますよ」
「ハッハッハッ！お前を捕まえるまで、ワシはなァ！残業手当なしだろうと風呂に入れなかろうととことん追うって決めてるんだ！」
彼はそれに笑みを浮かべて返した。
「…それにしてもよくわかりましたね、私がまだここにいると」
そう言いながら、窓を開けてベランダへと出る。風が彼の白のマントをなびかせなる。彼はハングライダーをだすとダイヤを月へかざし始めた。窓から差し込む月明かりがダイヤの中に注がれる。ダイヤの中で屈折がおこると、輝きを増して眩しいくらいに光りだした。
「ああそれは…」
中森警部がいいかけたそのとき

シュッ――

中森警部の横を切ってナイフが飛んできた。
「なっ！！！」
飛んできたナイフはキッドの太もも付近のハングライダーの翼を貫通し、壁にささる。
「知ってたか？獲物を狙って手にいれたその瞬間が、無防備で一番狩りやすいんだぜ？」
手にナイフを持って、月に照らされコツコツと歩いてくる人物を見て、キッドは口元をつりあげた。彼の額からは、一筋の汗が流れる。
「なるほどね…。警部、どうやら今回はショーを台無しにしてくれそうな、少々厄介な騎士（ナイト）を手駒にお持ちのようで…」

ナイフを手でもてあそびながら、新一は言った。
「そんじゃ、チェックメイトといきますか…怪盗キッドさん？」

獲物（後書き）

こんにちは。感想を書いてくれた方がいて、嬉しかったので少し頑張っちゃいました。３話から５話まで一気にお届けします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6981m/

宝石のタイムカプセル

2011年10月3日01時33分発行